

1. 課題名 温州ミカンの生産改善の検討

2. 目的

省力的な栽培技術体系の導入により栽培においての問題点の解決方法検討を行い自宅での温州みかんの生産改善につなげる。課題として、生産量の安定と樹体管理の簡素化を図るための隔年交互結実栽培の導入、浮皮発生の軽減および密植根域制限栽培について検討した。

3. 方法

試験1 隔年交互結実栽培への誘導

1) 隔年交互結実栽培誘導

①植物成長調整剤の利用による花芽抑制、②植物成長調整剤による全摘果

2) 隔年交互結実栽培（収量の推移）

試験2 植物成長調整剤による浮皮発生軽減

試験3 防根シート（不織布）による密植根域制限栽培

4. 結果の概要

1) 隔年交互結実栽培への誘導

(1) 植物成長調整剤の利用による花芽抑制については、着蕾が減少した。

(2) 植物成長調整剤による全摘果は、処理区全般に無散布区と比べて顕著な差は認められなかった（第1図）。

(3) 隔年交互結実栽培（収量の推移）は、誘導開始から2年で明確な隔年交互結果樹が養成できた（第2図）。

2) 植物成長調整剤散布による浮皮発生軽減

南柑20号では、処理区で浮皮発生割合が減少したが、十万温州では、浮皮発生割合の減少が顕著でなかった（第3図）。処理区では着色が遅延した。

3) 防根シート（不織布）による密植根域制限栽培

総新梢伸長量については、処理区と無処理区に差は無かった（第4図）。

5. 考察

1) 試験1 隔年交互結実栽培への誘導

(1) 隔年交互結実栽培誘導（植物成長調整剤の利用）

①植物成長調整剤の利用による花芽抑制

南柑20号では、無散布区を含めた全試験区に着蕾は認めず、処理区の中ではジベレリン+ハーベストオイル混用散布区の効果が高かった。

十万温州では無散布区、ジベレリン単用散布区で着果がなく、ジベレリン+ハーベストオイル混用散布区でわずか4個着果がした。着果が樹体下層部であったため、散布ムラと考えられる。

②植物成長調整剤散布による全摘果

十分な摘果効果が確認できなかったのは、長雨の関係で薬剤散布適期が遅れた事が原因と考えられる。

(2) 隔年交互結実栽培（収量の推移）

①2016 年成り年樹は 2 年目収量が無く、2016 年不成り年樹は 2 年目に大きく収量が増加したことから、十万温州については隔年交互結実栽培の誘導から 2 年で定着できることが確認できた。

②南柑 20 号については直花果中心で着果量が多く小玉果が目立った。反面、十万温州は有葉果中心で価格の高い階級（L、M、S 級果）割合が多かったことから、隔年交互結実栽培は十万温州が向いていることを再認識した。

2) 試験 2 植物成長調整剤散布による浮皮発生軽減

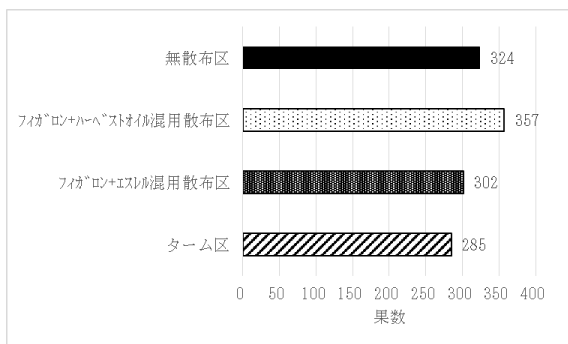
(1) 南柑 20 号については浮皮発生軽減効果が確認できた。しかし、十万温州は浮皮軽減効果が鮮明ではなかった。十万温州は貯蔵用温州であることから果皮が厚く、果皮と果肉が離れにくい品種であるということがわかった。

(2) 南柑 20 号、十万温州は散布により着色の遅延が認められたが、収穫果の貯蔵中に緑色果皮の退色が進むことから、貯蔵用の十万温州については問題がないものと考えられる。

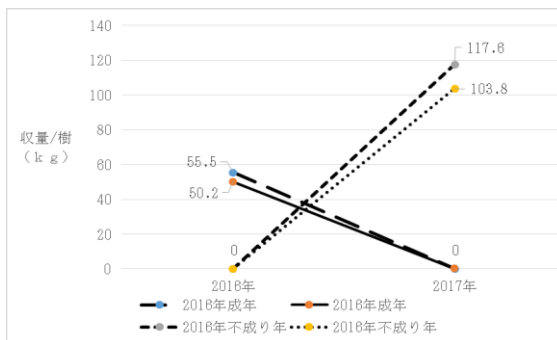
3) 試験 3 防根シート（不織布）による密植根域制限栽培

(1) 処理区と無処理区で差が出始めるのに今後 2 年は必要であると考えられるので、今後の調査研究に期待したい。

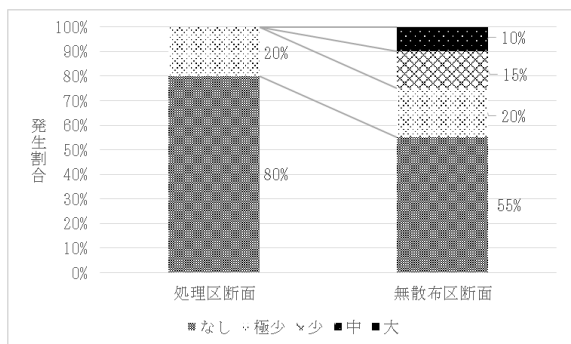
6. 主な試験データ



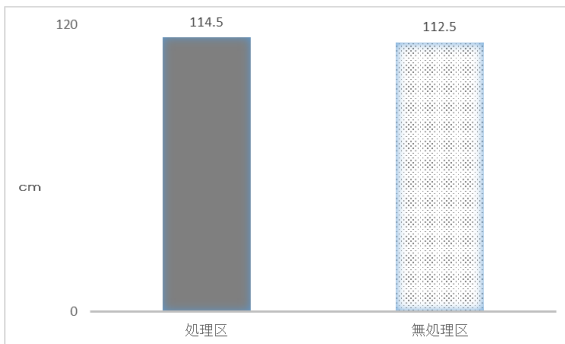
第 1 図 着果数（全摘果、植調剤）



第 2 図収量の推移（十万温州）



第 3 図 浮皮発生度（南柑 20 号、果実断面）



第 4 図 総新梢伸長量の比較